

書評

鎌田浩毅 著

火山噴火—予知と減災を考える—

岩波新書 新書版 240頁 定価 780円 (税別)

ISBN 978-4-00-431094-5

鎌田浩毅 監修

火山の大研究

PHP 研究所 A4判変形上製 80頁 定価 2800円 (税別)

ISBN 978-4-569-68730-8

かつて、数学者である友人に、「数学の世界では、研究を進める上でどういうことが重要なのか」と尋ねたところ、間髪を入れず「それはコミュニケーションだ」という答えが返ってきた。いろいろな場所に出かけ、講義やセミナーをしているうちに、よいアイデアが生まれるのだという。誰にも邪魔されず静かに難問と格闘する数学者の姿を想像していた私は、一瞬虚を突かれたような気がしたが、なるほどと思直した。彼の説が世の数学者の平均的な意見を代弁しているかどうかはともかくとして、コミュニケーションの中から新たな展開が生まれるというのは、多様な研究対象と学問分野の集合体である地球科学においても共通することに違いない。

ここで紹介する二書は、いずれも火山学の専門書ではなく、一般の読者を想定したいわゆるアウトリーチ本である。専門書にみられる網羅性や体系性よりも、受け手の理解と反応を強く意識した構成・内容になっている。これは、著者/監修者である鎌田氏が、日々の講義の中で学生たちとのコミュニケーションを通じて得たスタイルなのだろう。

『火山の大研究』は、主に小学生の調べ学習を念頭に書かれた解説図鑑とでもいうべき構成で、火山の成り立ちや噴火の仕組み、火山のもたらす恵みなどが、写真と図版をふんだんに使って解説されている。おそらく、本誌の読者諸氏が書店でこれを手にとり個人用として購入することはあまりないだろうと思われるので、もう少し本書の特質について触れておこう。本書には、コラム記事のようなページが

いくつかあり、そこでは、火山学者である鎌田氏からの子どもたちに対するメッセージのほか、火山学者が普段どのようなことをしているのかについても書かれている。つまり本書は、火山学の知識だけでなく、科学者という職業を紹介している本でもあるわけだ。そういえば、監修者の露出度がこれほど高い図鑑本はこれまで見たことがない。火山を紹介する風景写真の中に、監修者自身が笑顔で入っているものが多数掲載されているのである。アウトリーチという、最新の研究成果をわかりやすく解説するというイメージが強いが、子どもたちにとっては、火山学者という仕事そのものも興味の対象であるに違いない。

このスタンスは、『火山噴火—予知と減災を考える—』にも通底している。こちらは中高生から一般向けを想定して書かれた入門書であるが、ここでも著者は、網羅的な知識普及を狙っておらず、火山学あるいは火山学者への関心を効果的に喚起するためのトピック、エピソード、アナロジーを撰んで使用しているようである。今の世の中では、必要とあらば高度に専門的な情報も比較的簡単に入手できる。入門書として重要なのは、完備された情報そのものではなく、関心を持ってもらうためのイニシエーションなのだ。火山学者が地層の中に枕状溶岩を発見するとどうして興奮するのか、火山学者はなぜ噴火の初期に噴出した火山灰を血眼になって採取し分析するのか。本書ではこの種の記述が随所にさりげなく挿入されている。しばしば、火山学者の行動や感覚は一般の社会通念とは隔たりがあり、ときにそれはいらだちや滑稽さとして人々の心に伏在している。しかるに、書き手と読み手の背景感覚にギャップがあればあるほど、それが解消されるときに面白さとインパクトも大きいのである。また、そこにこそアウトリーチの役割があるともいえるだろう。

このようなことは、何も一般向けのアウトリーチに限ったことではない。その意味で、『火山噴火—』は、大学等で教壇に立つ地球科学者にとっての講義指南書としても読むことができるだろう。本書が、まず火山噴火とはどのような現象かの説明にあたって、溶岩流や火山灰など一般の読み手がイメージしやすく実際に見ることのできる「モノ」から入っていることは注目すべきである。私を含め、観測に従